

「魚治 鮒寿し」を描く

西久松 吉雄

「魚治 鮒寿し」を描く

Name :

NISHIHISAMATSU Yoshio

Title :

Painting “Uoji Funazushi”

Summary :

The shape of the funazushi made in the Okubiwako area by the seventh generation master Uoji brings to mind Uichi Takahashi's work “Sakezu.” The process of painting funazushi provides a window onto the richness of nature and daily life in the Omi area.

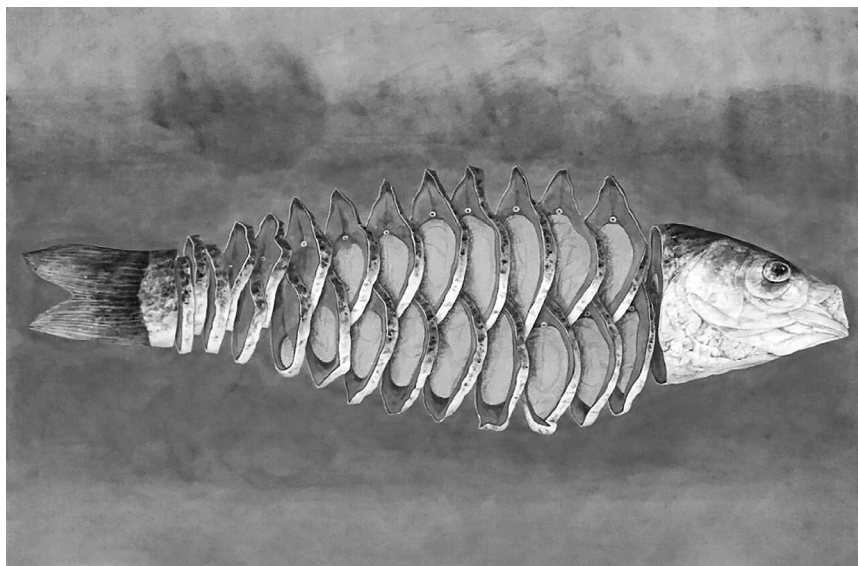
西久松 吉雄

鮒寿しを描ききっかけは、成安造形大学附属近江学研究所の公開講座二〇一六の近江のかたちを明日につなぐシリーズの中で、平成二八年六月第一回連続講座「鮒寿しとその環境が教えてくれること」と題して、左寄謙祐氏に講師をお願いしてからであった。

左寄氏は、江戸時代の天明四年（一七八四）創業の老舗鮒寿し店「魚治」七代目治右衛門を襲名して一子相伝の鮒寿しの伝統を継承、奥琵琶湖海津の料亭「湖里庵」にて鮒寿し懷石を提供されている。小雪が舞う日、狐狸庵先生で有名な遠藤周作氏が「湖里庵」と名付けた掛け軸のある間で鮒寿し懷石をいただいた。日が沈みかけた窓辺からは、初冬の湖北の山並みと琵琶湖岸近くに鴨とユリカモメがゆらゆらと水辺に浮かび、澄み切った空気の中で聞こえるのはさざ波の音のみであった。

「鮒寿しを描くこと」は、鮒寿しを知ることから始まる。伝わってきた歴史、それを育んできた自然環境、人の生活から生まれ育ってきたことなどを知るとは、描く対象をより深く理解しながら対象に迫ることである。

麴カビなどから食品発酵の作用を用いて日本酒、味噌、食酢、漬物、醤油、焼酎、泡盛などの発酵食品が作られる。鮒寿しは、



「魚治 鮭寿し」30号P 純金泥・岩絵具 石州楮紙

乳酸菌を用いて自然発酵されたものである。仕込み蔵に棲み着いて発酵する蔵持ちの菌を大切に育てて守る。乳酸菌という微生物が鮭寿しを作っている、発酵のお手伝いと段取りをしているに過ぎなく「守り（もり）をする」と言われる。

海津の地は、琵琶湖の水と川や山の水に恵まれた地であり、琵琶湖で育ったニゴロブナを海津の水と若狭の塩で漬け込む。

そしてニゴロブナとともに漬け込む米は、百瀬川と知内川によつてできた扇状地で育まれた米を使用する。また海津の厳しい氣候が味を深めるという。

琵琶湖にはギンブナ、ゲンゴロウブナなどが生息している。そして琵琶湖固有種のニゴロブナは体長二〇〜二四センチ、体重二〇〇〜五〇〇グラムで発酵食品鮭寿しの原料として卵を抱いたメスが使用される。オスも旨味が多く刺身や煮付けとして使われる。

四〇年ほど前に琵琶湖はよく魚釣りに通った場所である。ボテジャコの名前で知られているタナゴの中では大きなカネヒラという魚を、バケツいっぱい釣れる入れ食い状態であった記憶が今でも残っている。家に持ち帰るとボテジャコを醤油と砂糖と味麴で佃煮にして暖かいご飯と共に食べた。そのような記憶といままで鮭寿しを食べる機会があまりなく関心がなかったが、この公開講座を拝聴するうちに琵琶湖の地形と恵まれた自然環境から生まれた鮭寿しと、江戸から明治に移る時代の絵画変革期に生きた高橋由一の「鮭図」が重なってきた。

高橋由一の「鮒図」との出会い、高校生の頃に日本美術史の教科書に掲載されていたことが最初であった。その後、昭和四九年（一九七四）発行の至文堂「近代の美術 高橋由一 青木茂編」を購入して以来、この「鮒図」が脳裏から離れなかった。そして平成二十四年（二〇一二）九月京都国立近代美術館で「近代洋画の開拓者 高橋由一」展が開催され三点の「鮒」が展示されていて、再び出会いの感動が歓喜された。

「鮒」油彩・紙 明治十年頃（一八七七） 高橋由一四九歳頃の作 一三四・四六×四六・五センチ 重要文化財 東京芸術大学所蔵

「鮒」油彩・麻布 明治十一年（一八七八）一二七・五×三六・五センチ 山形美術博物館寄託

「鮒図」油彩、板 明治十二年～十三年頃（一八七九～八〇）一二七・五×三六・五センチ 笠間日動美術館

吊り下げられた塩鮒は重量感と存在感があり、その対象に迫る存在感に圧倒された。

一八七二年「花魁図」^{おいらんず}、一八七六～一八七七年「豆腐」、一八七七年「なまり」の写實的に描いたものがあり、「鮒」「鮒図」へとつながっている。一八八四年には、「川鰻図」^{かわますず}も同じように荒縄に吊るした鰻を描いたものがある。他に、伝高橋由一「鮒」作品もあり、由一の門人やその周辺でよく鮒が描かれていたらしい。

魚治の鮒寿しは、切り身の並べ方を魚の形状に沿って置かれ

ている。その点にも鮒図とイメージが重なり、メスのニゴロブナの卵の美しさや形状を墨と日本画材の岩絵具で石州楮紙に描き、余白の空間に思いを込めた。画面全体に純金泥を施し宋画を意識しながら、奥琵琶湖で感じた気候や風土を盛り込めればと念じながら筆を置いた。

参考文献

- ・「近代の美術 高橋由一 青木茂編」至文堂 一九七四年
- ・「近代洋画の開拓者 高橋由一」展 図録 京都国立近代美術館 二〇一二年

成安造形大学附属近江学研究所紀要 第6号

発行日 平成29年3月24日

発 行 学校法人京都成安学園 成安造形大学 附属近江学研究所
〒520-0248 滋賀県大津市仰木の里東4-3-1
電話 077-574-2118

発行者 西久松吉雄

編 集 成安造形大学附属近江学研究所

印刷所 宮川印刷株式会社

©Seian University of Art and Design 2016

ISSN 2186-6937